

平成18年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 キチジ

学名 *Sebastolobus macrochir*

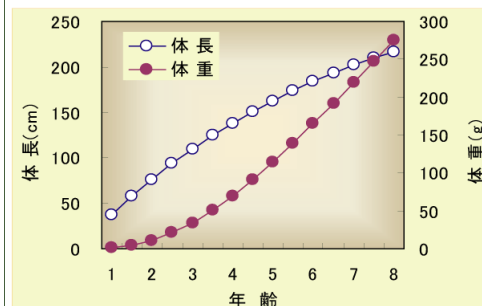
系群名 太平洋北部

担当水研 東北区水産研究所



生物学的特性

寿命: 20歳程度
成熟開始年齢: 雄3歳、雌5歳
産卵期・産卵場: 1～4月、分布域全域
索餌期・索餌場: 周年、水深350～1,300mの深海域
食性: エビ類、オキアミ類、クモヒトデ類、端脚類、多毛類、魚類
捕食者: マダラ、アブラガレイ

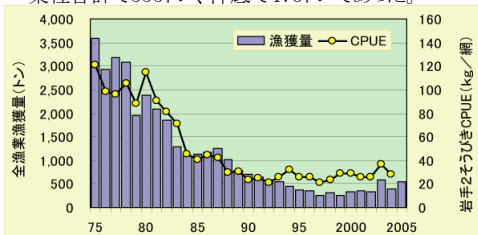


漁業の特徴

太平洋北部では、キチジは主に沖合底びき網漁業(沖底)で漁獲されるほか、小型底びき網漁業、底延縄、底刺網で漁獲される。近年、沖底船は9～12月にスルメイカを狙って操業することが多く、スルメイカより深場に生息するキチジに対する漁獲圧は以前より弱くなっている。しかし、資源量の増加によりキチジ狙いの操業が増える可能性があり、今後の動向を注視する必要がある。

漁獲の動向

全漁業種類による漁獲量は1975～1985年に急激に減少し、1997年まで減少の一途をたどった。沖底の漁獲量も同様で、1970年代には2,000トン前後と高い漁獲量を維持していたが、その後、減少傾向が続き、1997年には過去最低の229トンとなった。しかし、近年の漁獲量は1997年よりも高い値となっており、2005年の漁獲量(暫定値)は、全漁業種合計で555トン、沖底で473トンであった。

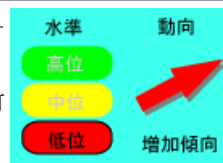


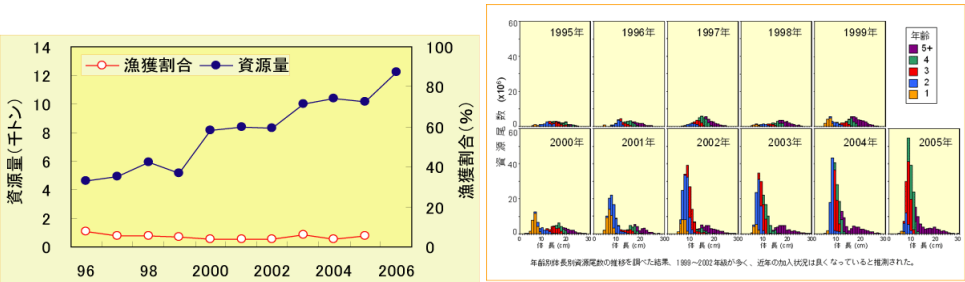
資源評価法

秋季にトロール網による底魚類資源量調査を実施し(水深150～900m、計149点)、面積－密度法により資源量を推定した。調査海域は青森県～茨城県沖で、太平洋北部のキチジの分布範囲をカバーしている。曳航式深海ビデオカメラとトロール曳網調査により、本調査で用いたトロール網の身網による採集効率(網の前にいた魚が網に入る比率を示す係数)は0.3と推定されているため、この値を用いて資源量の推定を行った。

資源状態

2000年以降、資源量の増加傾向が認められ、近年のキチジ資源は増加傾向にあると考えられる。2006年の資源量は12,200トンとなり、1996年以降で最も高い水準となった。年齢別体長組成の変化によれば、1995～1998年に観察されなかった体長5～7cm程度の1歳魚が1999～2003年まで連続して出現していた。2歳魚時点では1999～2002年級の資源尾数が多く、この4つの年級群の加入が良好であった。しかし、加入の悪い時期に戻った可能性も考えられ、今後の動向が注目される。また、漁獲量およびCPUEの長期的な推移から、資源水準は現在も低位にあると考えられる。資源の動向は増加傾向と考えられる。





管理方策

キチジの資源は低水準にあり、資源量を増加させることが必要である。近年の資源量は増加傾向にあり、現状の漁獲圧は低いと考えられる。キチジ資源が低水準にあること、悪い加入が続く可能性を考慮し、漁獲を現状以下に抑えることにより資源量の増加を阻害させないことを資源管理目標とした。ABCは、現状の漁獲係数 (Fcurrent) を8割に削減した時の漁獲量として算定した。

	2007年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	570トン	0.8Fcurrent	0.040	3.7%
ABCtarget	460トン	0.8・0.8Fcurrent	0.032	2.9%

- ABCは10トン未満を四捨五入した値
- F値は漁獲割合を漁獲率として算出
- Fcurrentは2002～2004年の平均のF
- 漁獲割合はABC／資源量

資源評価のまとめ

- キチジ資源は低水準に留まっているが、増加傾向が認められる
- 1999～2002年級群の加入は良好であったが、2003年級群の再生産成功率は低い
- 今後、悪い加入が続く可能性がある

管理方策のまとめ

- 漁獲を現状以下に抑えることにより、資源量の増加を阻害せず、資源回復を確かなものにする
- 急激に漁獲圧を高めないことが重要である
- 漁獲開始年齢を引き上げて小型魚の漁獲を控え、親魚量の増加を計ることが重要である

資源評価は毎年更新されます。